

近隣社会としてのスラム

——ムンバイの事例から

ラーフル・シュリヴァスタヴァ
(常田夕美子・松川恭子 翻訳)

1 はじめに

本論では、活動家や知識人のイニシアティヴによって始められた、住民たちが自身の居住地域の歴史を記録し、情報交換するという近隣社会プロジェクトの仕事を紹介する。ここで「近隣社会¹⁾」という言葉は、主観的な意味で（対立があったとしても）共有された地理的空間という意味で用いる。この理論的枠組みは、近隣社会とはローカリティの感覚を生じさせるさまざまな社会過程の現れだとする人類学者アルジュン・アパデュライの考え方に基づくものである²⁾。

ここでの議論は、（今やポスト近代的産業都市といえるかもしれない）産業都市の中心にひっそりと隠されたコタチワディという小村落と当プロジェクトとの関わりから主に材料を得ている。村落の住民との会話を通じて、都市文化遺産の問題や適切な都市住居の概念をめぐる重要な洞察を得ることができ、その洞察はPUKAR（都市における知識、行動と研究のパートナー）における対話に反映された。そして、最終的に、現在ムンバイで懸念材料となっている住宅、開発、スラムなどの多くの問題について、さまざまな議論が形成されることとなった。

本論は二部構成である。第一部は、コタチワディに焦点をあて、近隣社会プロジェクトの経験を描写する。第二部は、当プロジェクトが主に「スラム」という概念を検討することを通して生じてきた理論的な諸問題を扱う。簡単に述べると、スラムという概念は、ムンバイのような都市の未来に関して、不安定であいまいな問題を含むといえよう。特に、住居の選択という点で、都市的であるとはどのような意味を持つのかという基本的な考え方の文脈において、そうだといえる。しかし、この問題は、都市の歴史的経験に関わるものであると同時に、都市についての現代の知的概念が有する偏見に関わるものである。

2 ウィルソン・カレッジでの近隣社会プロジェクト

まず、近隣社会プロジェクトの簡単な歴史について述べることにしよう。その過程で同

Rahul SRIVASTAVA リサーチ・フォーラム主宰
ときた ゆみこ 翻訳家
まつかわ きょうこ 奈良大学社会学部

時にムンバイの紹介もすることになる。

近隣社会プロジェクトの話は、西インドにあるムンバイのウィルソン・カレッジから始まる。当地域において、近代教育機関は、19世紀半ばに当時ボンベイ管区と呼ばれた都市中心部に設立された。ボンベイは、17世紀後期以降、商人、貿易業者、労働者が大量に移住してきた波止場を中心に発展した。

ボンベイ大学は1857年に設立され、同じ年に、スコットランド宣教師たちが運営するウィルソン・カレッジが設立された。筆者は、カレッジの設立からちょうど138年後に、社会学および社会人類学の講師として着任した。多くのムンバイのカレッジと同じく、ウィルソン・カレッジは、私立の信託（この場合は北インド教会と関連する信託）によって運営されているが、国の助成金も受けているので、学生たちはわずかな学費を納めるだけで文科系あるいは理料系の学位取得をめざして学ぶことができる。学生の多くは、カレッジの周辺の旧市街にあたる近隣地域³⁾から来ている。

時が経つにつれ、筆者は、学生の興味を保つ唯一の方法は、シラバスのほかに適切な学習プログラムを工夫して設けることだと気がついた。大半の学生の希望進路は、学界以外の場所にあったので、学位は就職のために必要な公的証明書であるという実用的な理解に基づいて、彼らの学習アプローチは形成されていた。筆者の専門の細かい議論には、彼らはまったく興味を示さなかった。しかし、その一方で筆者が発見したのは、彼らの多くは、ムンバイという都市の政治、社会、文化については、情熱的な関心を持っているということだった。その都市は、彼らの地域的、言語的、そして国民的な帰属意識さえも弱めるほど、重要なアイデンティティをもたらしものであったのだ。

この「ウィルソン近隣社会プロジェクト」という学習プログラムは、学生たちに自分たちが住む建物、家、地域の歴史や民族誌を映像やテキストとして記録させ、自分たちの家族の歴史をその物語のなかに統合させようとするものだった。そして、その上で都市住民、国民あるいはほかのどのような形であれ、アイデンティティや帰属という、より大きな問題系のなかに自らを位置づけさせようとするものであった。

このプログラムの過程で、彼らの生活を都市の文化政治とつなげる対話が生み出され、さまざまな形で帰属のあり方についての問題が提起された。それによって、議論のテーマが複数生み出された。知の生産、都市の社会史における自分たちのカレッジの位置、画像とテキストのあいだの教育学的なヒエラルヒー、言語差別主義の文脈における都市の暴力的な歴史への応答、などなどである。そのうち本論に直接関連するひとつのテーマは、ムンバイの建築環境の物語と関わっていた。⁴⁾

当プロジェクトは、学生たちに自分たちの家を写真に撮り、都市の建築史のなかに位置づけることを要求した。当然のことかもしれないが、その結果は途方にくれるほど種類の



写真1 工場労働者のための建築物
(撮影 田中雅一)

多い建築物のコラージュだった。本来は工場の労働者たちのために設計されたバラックのような建築（チョール chawl）もあった。一般的にはスラムと理解されるような掘立て小屋もあった。アールデコ、インド・サラセン様式、ビクトリア朝様式、エドワード朝様式、ゴシック様式など、都市の公式建築物の植民地的建築様式の寄せ集めに影響を受けた建物もあった。ムンバイが位置するマハーラーシュトラ州、あるいは隣のグジャラート州の小さな町のどこにでもあるような建物、居留地、集団居住地もあった。最後に、コテージやバンガローなど、農村の住まいのようにみえるものもあった。

この実習は、コタチワディにおけるプロジェクトの次の段階を基礎づけることとなる議論を生み出した。その議論は次のとおりである。ムンバイは、単にスラムと高層ビルからなる都市ではない。そのような二分法は、1950年代以降における都市の建築史の枠組みとなっていたが、現実には、都市の建築史が明らかにしているのは、スラムともあるいは高層ビルとも十分に言い切れないさまざまな種類の住居が存在するということだ。前述の二分法は、単に都市における収入やライフスタイルの極端な格差を目にみえる形で描写するための便利なメディアの創造物であり、住居の複雑な歴史を覆い隠すものである。

コタチワディ近隣社会プロジェクトを通じて、以上の議論は、スラムについて、そして都市自体とその未来を理解する上でスラムの存在が何を意味するのかについて、より強い主張に発展していった。

3 コタチワディ近隣社会プロジェクト

学生の一人が自分の家の写真を数枚提供してくれた。その優雅な建築の詳細や古風で趣のあるデザインが私の興味を引いた。それは、都市中心部のギルガウム地域にあるコテージで、同じような家が立ち並ぶ大きな集合住宅の一部であった。それは、ルカーノ・アルヴァレスという学生の家族のものであり、彼は、後ほどPUKARで私と協力して、コタチワディという小さな都市村落において近隣社会プロジェクトを立ち上げた。



写真2 コタチワディの家屋（撮影 田中雅一）

コタチワディは、19世紀末から20世紀初頭にかけて都市中心部に建設された、28ぐらいの小さなコテージやバンガローの集合からなる。現在、それはインド・ポルトガル史に関連する特殊な建築装飾のために都市文化遺産区域とされている。

コタチワディという名前は、コト氏という地主の名前をとったものである。コト氏は、都市のなかでもっとも古いコミュニティであるパタレー・プラブー（ポルトガル人の到着

以前から、地域の王に奉仕するためにグジャラートから移住してきたといわれる）に属していた。彼は、19世紀末に、「イースト・インディアン」（16世紀にキリスト教に改宗したマハーラーシュトラ州のさまざまなカーストの村民）の友人たちや他のコミュニティの成員たちに、自分のワディ（*wadi* 庭、中庭、果樹園）の購入と開発を許可した。こういった経緯で当村落は誕生したのであった。当初から、その家屋には、ポルトガル式のヴィラ、マハーラーシュトラ沿岸部にみられるコテージ、ゴア式の家、地域にみられる普通のコテージやバンガローなど、さまざまな建築要素が存在した。20世紀初期の全盛期には、村落には88の個人所有の家あるいは借家があった。⁵⁾

ムンバイ都市地域文化遺産保存協会（MMRHCS）は、村落における PUKAR 近隣社会プロジェクトに資金を供給してくれた。当協会は、コタチワディで建築研究やプロジェクトを定期的におこなっていた。そのなかでもっとも重要なプロジェクトは、ムンバイ在住の建築家アバ・ナラヤン・ランバによるものだった。協会は、近隣社会プロジェクトが村落の社会史を研究するためだけではなく、住民たちに、村落の文化遺産としての価値をより強く感じさせるものとなることを望んだ。

研究計画が、住居という文脈で、住民たちに自分たちの家族史を記録してもらうことをその一部に含んでいたため、彼らは自発的にその企画に携わるだろうとわれわれは読んでいた。そもそもの近隣社会プロジェクトの意味は、地域史の調査と記述において、できるだけ住民参加を促すことにあった。

結局、当プロジェクトの参加型アプローチによって、期待どおり、短いデジタル映画、フォト・エッセイ、家族プロフィール、ホームページ、マンガの下書きまでが成果として生まれた。さらに、プロジェクトの資金を供給した組織であるムンバイ都市地域文化遺産保存協会（MMRHCS）を含む都市の公的な団体による、文化遺産の捉え方についての批判的な議論もでてきた。社会史や文化史を無視して、建築物だけを取り上げるのは、文化遺産保存運動にとって好ましくないということが、その議論から明らかになった。住民たちは、すべての住居、すなわち、専門的には公的に指定された文化遺産の枠組みから外れるものも入れて村落の物語のなかに含むことを主張した。こうして、プロジェクトの射程を広げることにより、公的には文化遺産ではないチョール（労働者用バラック）やその他の建築物も、文化遺産に関わるものとされたのであった。そして住民たちは、最終的には、コタチワディ住民文化遺産福祉協会という慈善トラストを設立したのであった。「福祉」という言葉を入れたことは、地域社会の文化史の複雑な状況理解を示すという意味で重要であった。協会が最初の公的な募金活動のための祭典を主催したとき、住居は物語の一側面に過ぎず、食文化、音楽、過去に関するノスタルジックな語りがもうひとつの側面をなしていた。⁶⁾

一部の住民たち、特に若い住民たちにとっての問題は、ワディに関して、文化遺産の問題を超える議論を発展させることであった。彼らの考えによると、ワディは、都市在住の建築家チャールズ・コレアが低層密集型と名づける居住区のもっともよい例である。⁷⁾ コレアは、そのような住居は、ムンバイのような都市に適しており、将来の都市計画政策に役立つと信じている。当プロジェクトは、その見解をさらに発展させようとした。それは、

コタチワディのような居住地を保存するという課題を、都市の将来に関するより大きな議論、すなわち何百万人もの貧民たちへの住宅供給という難問と統合しようという試みであった。

4 スラムと都市

その出発点になったのは、二人の年老いた住民による回想だった。彼らによると、20世紀初頭に、ボンベイのためのより大きな都市計画に携わっていたイギリス人の土地調査官たちが、村落をスラムとして分類したということだった。

しかし、何度か試みたものの、その事実を文書資料によって確かめることは結局できなかった。記録には、村落の実際の名前が書かれているだけで、その裏に潜む想定された分類については言及されていない。現代の建築家、都市計画家、政府の役人に尋ねてみたところ、多くの人たちは、住民たちの意見に同意した。彼らがそう確信したのは、現在においても多くの住居は、歴史的には個別の村落であるにもかかわらず、まとめてスラムと言及される傾向があることに気がついていたからだだった。ボンベイに関するいくつかの歴史資料のなかには、フォート地区のすぐ外側にある現地人街についてもスラムと記録しているものもあった。⁸⁾コタチワディについて同じように呼ぶのは、その伝統を継承することになる。

もちろん、非都市的な居住地として明確に認知され、個別の開発法が適用された「ガオターン *gaothan*」と呼ばれる村の土地は存在する。しかし、開発業者の取り扱いおよび近隣の居住区の一般の認識において、それらは、スラムと呼ばれる居住地との区別がそれほどはっきりしないものとされる。

ドラヴィヤやジュリ・メリのような大規模なスラム街の発展についての調査によると、それらの起源は標準化された過程によるものである。すなわち、貧しい移民たちが地域の伝統的な村落の周辺に集まるというものである。移民たちがそこに住居を構えるのは、以前の生活との連続性がみられるからである。それにそこは、安かった。より古くて大きなスラムは、都市の周辺の村や、価値がないとされた土地や、あるいは伝統的に不浄とされる仕事（ドラヴィヤの場合は皮はぎや皮なめしなどの仕事）をおこなうカーストが所有していた土地の周りに発展した。

ジュフウ、ウォルリ、バンドラなど、比較的裕福な地域の周りに発展したスラム街は、より矛盾と抗争を含んだ関係を示した。建築業者は、開発のためにそれらの土地を簡単には取得することができず、多数の非公式な所有権取引によって、その領域内に伝統的な建築物がたくさん建てられるようになった。それは、チョール、村落、長屋、一軒家、あるいは突然建てられた高層ビルなど、一言でいえば、まったく雑多な建物の集まりであった。

コタチワディもそのような多様性を反映するものであった。文化遺産という標準化されたラベル付けにもかかわらず、美しい19世紀の住居は、出し抜けに出現するモダニスト建築、飾りたてたアールデコ建築、多数の伝統的なチョールなどと乱雑に隣接する。

スラムと村落の分類のあいだに位置するそれらの中間的な空間のすべては、しばしばス

ラムとして一括された。その傾向は、建設業界の圧力団体や公的な都市計画の語りにおいて顕著にみられるものである。ただし、小さなアパートのために多額の金を払う中間層やアッパーミドルの市民のまなざしもそれをはっきりと反映している。彼らは、伝統的な建築物が乱雑な不協和音を奏でて立派なスラムに発展しそうな周囲の風景を軽蔑して眺め、それらの空間は、最終的には合法的でちゃんとした高層ビルのために撤去されるべきだと考える。¹⁰⁾ そのまなざしは、都市がいつも繰り返してきた変化と変容についての古い語りを再現するものである。

他の多くの植民地都市のように、ムンバイの建築環境においては、植民地行政官と「現地人」のための空間は明確に区別されていた。18世紀末には、後者は主に波止場の周辺に生まれ、フォート城壁の内側と周辺に発展し、最終的には、カルバデヴィ、ギルガウム、モハメドアリ・ロード、バイチュラ、マザガウンなどのダウNTOWN地区を構成するようになった。20世紀初頭以降は、工業都市としてのボンベイが現れ、労働者階級の居住地域が、それに特徴的なチョールという建築物とともに、発展するようになった。

すでに述べたとおり、1950年代には、スラム対高層ビルという単純な二分法の始まりがみられた。それは、ムンバイにおける建築の初期に存在した多様性を無視した言説を代表するもので、高層ビルを中心とした都市になるという願望によって、都市の未来に関する認識を変化させた。その願望によって、次第にあいまいな住居すべて、特に昔の「現地人街」の建築物にみられるようなエスニックな要素を体現したもの、および、農村的ということで不適切だとみなされる建物を消去することを目的とする過程が始まった。¹¹⁾ したがって、1980年代に、都市の文化遺産保存運動が本当に力をつけ、無視できない動きとして強化されるまでに、旧市街の大部分（旧賃貸法によって保護されていない区域）は、植民地経験の否定的な部分であるという理由で壊されてしまった。¹²⁾

さらに、コタチワディのような場所は、村落だったので、アナクロ的な場所としてみられがちであった。多くの「現地人」的な空間は明白に都市的な建物だったが、コタチワディの「農村的」な雰囲気はさらに問題を深くした。植民地的な「現地人」街は、移民たちが持ってきた農村の記憶を特に問題なく吸収した。それらの記憶は、コタチワディのような住居に、古風で趣のある建築装飾をもたらした。しかし、結局そうした農村的な装飾や特徴によって、それらの集落は、いかなる農村的な記憶からもできるだけ遠ざかろうとする「都市的」な現在の理念と矛盾するようにみえはじめたのであった。

都市やその建築に関する以上の考察から、スラムの概念自体をわれわれは分析することができる。

5 都市のイデオロギー

マイク・デイヴィスは¹³⁾、グローバルなレベルにおける住宅供給の未来やスラムの増加について、広大な視野で語る。不平等の増加は、自由経済政策を発展途上国に押し付けることによって生じるという彼の分析は見事である。しかし、彼はスラムという言葉をやや表層的に用い、それらの不平等が、特にムンバイのような都市の文脈においていかにスラム

と関連しているかについて十分に理解しているとはいえない。

ムンバイは、歴史上ほとんどずっと資本主義的であったが、1947年のインド独立後、50年代には社会主義的な政治経済に支配された。ついでながら、われわれも知るとおり、50年代は、都市において先例のないスラムの増加が始まった時期でもある。

現在、21世紀初頭において、ムンバイの人口1200万人のうち半数はスラムに住んでいる。インド全体においても、すべての都市部（いくつかの農村部でも）において、未曾有のスラム人口の増加がみられる¹⁴⁾。

しかし、これに対して別の見方もある。スラムは特定の経済関係の現れであるというデイヴィスの見方を受け入れるとすると、スラムは農村においても必須な現象であると考えざるを得ない。土地なしや貧しい農民の一部屋しかない小屋の集まりが歴史的にはスラムとしてみなされてこなかったからといって、それらがスラムとして機能していなかったとはいえない。この事実だけでも、現在の地球は歴史上初めてスラムの増加を経験しているというわけではないことがわかるだろう。それは、経済開発指標がほとんど唯一の都市開発の指標であることを公然と認める経済に合わせた形で、資源を再配置しているのに過ぎないのである。

ムンバイでは、今までほとんど停滞していた政府の都市計画機構が、これから予想されるところの、これまでになかったレベルの都市化をやっと直視するようになった。それは、都市部に対する投資の増加につながる。しかし、デイヴィスに対するヤン・ブレーマンの批評が指摘するように、村落にもスラムが生じており、都市化の過程は大変複雑になっている。インドの都市周辺地域の多くにおいて、スラムと村落を区別するのはますます困難になっているのである。

ムンバイの事例をみると、スラムは、世界の経済政策に対する批判をいかに展開するかという課題に関わるだけでなく、その過程において、都市の概念がいかに機能しているのかという問題とも関わっている。

リンダ・クラークとデヴィッド・ハーヴェイが論証するように、資本主義は常に都市においてもっともよく作用してきた。それは、工業化以降の近代都市の台頭に応答しただけではなく、都市が近代的な生活にもっとも適した人間の生息地であると積極的に宣伝してきた。さらに、その宣伝は、建設業という物質的な基盤をもつ。建設業は、その過程によってもっとも利益を得て、常に新しい土地を探し、土地利用の古い形式を横領する方法をみつけようとしている。

建設業は、建築家、技術者、都市計画者とともに、経済的变化の過程のなかで、イデオロギー的に中立の役割を果たしてきたと認識されている点で、歴史的に有利である。長いあいだ、彼らに対しては、当然の経済的選択に奉仕するという印象、すなわち産業化は都市化に続くという論理があった。しかし、デイヴィス自身が論証するように、彼らは、その過程自体を導くこともある。そのとき、彼らは、経済的利益と同様に特定の種類の都市を念頭においた都市の概念をイデオロギーのよりどころとして、イデオロギー的正当化をおこなう。彼らは、都市を、異なる諸イデオロギーが作用する場所から、イデオロギーそのものへと変容させる。特定の種類の都市、すなわちショッピング・モールとエンターテ

インメントの場に近く、プールと広い駐車場が付いている高層アパート群は、正しい願望の対象として販売されているのである。

その結果として、ムンバイのグローバル・シティとしての現在の自己イメージは、願望の対象としての特定の都市の形へと翻訳される。つまり、上海かシンガポールになりたいのだ。こうした高層への願望をあらわすもっとも明らかなしは何だろうか。それは、垂直にそびえたつスカイラインである。この願望は何をもたらすのだろうか。それは、ムンバイでずっと、特に1950年代から起こってきたことであり、特定の種類の住居をつくるための資源を集め、他のものを時代遅れだとすることである。

理論的には、高層アパート群はムンバイにおける人口過密の問題を解決するための方法として用いられてきたのだが、実際のところは、それによってもっと多くのスラムができただけであった。これは、高層アパート群ができることによって、建物の値段はあがるし、また、より広い道路やより大きな駐車場が必要となり、結果として、単位面積あたりの居住者が少なくなってしまうような土地利用の新しい経済が成立してしまうからであった。

ムンバイでは、以前にあったような独占的な土地利用という植民地的形態は、独立インドにおいて、大土地所有を保護し、腐敗した建築業者と結託する、完全に墮落した行政にとってかわられた。こうした状況を正当化するのに用いられた議論は、ムンバイの土地は狭く、人口が多すぎるということだった。さらに、近代都市としての街のイメージがあることによって、それにふさわしい住居を建設するのにすべての資源が使われることとなった。

こうした過程が近年もっともはっきりと明らかになったのは、この都市の産業史が書き換えられたときであった。何エーカーもある土地を持つ、古くて使われなくなった工場が、市場に売りに出された。住居問題の活動家が、一定割合の土地は貧民用の住居をつくるために使われるべきだと声をからして主張したにもかかわらずである。当局は、その要求に応じなかっただけでなく、広場や公園に土地を利用するということさえも拒否した。その地域の古いチョールは、ショッピング・モールや高層アパート群を建設するために、すぐに壊された。

しかし、注目すべきは、こうした過程や選択は新しいものではないということである。それは古い話の繰り返しなのだ。20世紀初頭のイギリス人土地調査官がコタチワディをスラムと分類した視点と、まったく同じ過程がここにはある。そのときでさえ、現地の街は、帝國的なプロジェクトに空間をゆずるためにあちらこちらへと移されたのであった。

スラムのことはいうまでもない。今日の建築業者は、同じような中間層用のビルを建てたがっている。そして、ムンバイのほとんどの中間層は、1960年代に広がった4階建てのビルに住んでいるのだ。

世界のさまざまなスラムをみると、その言葉の相対的な性質に驚かされることだろう。ある文脈においては、それは、水やトイレがないというような、もっとも基本的な意味で貧しい生活環境のことを指しているようにみえるし、他の文脈では、ちゃんとした中間層の住居群でありながら、それが埋め込まれたより大きなストーリーとの関係においてのみスラムといえるようなものを指すこともある。

こうした通文化的なスラム理解に立脚し、さまざまな文脈を通底するひとつの共通の変数を探すならば、それは以下のようなものになるだろう。つまり、スラムは単に、それが埋め込まれた経済のより大きな願望との対比において、不適切な住居を指す。

貧しいスラムは、ストーリーから脱文脈化されているのではまったくない。ここにおける真実は、貧しく不適切な住居は一緒にくたにされて、建設業界が望むような、特定の方向へと押し出されているということである。

ムンバイのような都市で、建築業者や都市設計者によって用いられる、理想化された高層都市という考え方こそが、より多くのスラムをつくりだす土地利用のパターンを生み出しているのだ。

これまで、都市貧民は自らの貧しさを強調することで危機に対応してこようとした。これはデイヴィスが、経済的な変容こそが問題の主要な点であるということをいうために、取り上げた動きである。しかし、ホームレスやスラムの問題を考えるためには、不適切な住居とは何かという問題を取り上げる必要がある。このためには、たとえば、前に触れたように、チャールズ・コレアが『新しい風景 (*The New Landscape*)』という著書で展開したような、よく考え抜かれた議論を使うことができよう。コレアによると、ムンバイの多くの地域でみられる高密度で低層の建築物は、インドだけでなくアジアの多くの地域に広がるものである。具体的にいうと、こうした住居の理念を放棄して、高層のアパート群を建てようとするこそが、建築業者や都市設計者にとってもっとも大きな利益となり、世界中にスラムを増やすことに貢献しているのだ。

コレアによると、19世紀末から20世紀初頭のムンバイにおいて、建築家、建築業者、居住空間に対する居住者の関係は大きく異なるものであった。居住者は、家を建てる過程をより掌握していたし、建築技術についての記憶は、これらの空間を開発するのに決定的な役割を担っていた。村落や、小さなビルの集まりや、バンガロー区域は、こうした交渉過程を通じて建築されていたのであった。主要な建築会社や施工会社が波止場や役所や公共施設を形づくったものの、現地人街のほとんどの居住者は、自分の家を建てる際に自分たちの声をより反映させることができた。多くの場合、20世紀初頭までは現地人の空間は驚くほど「農村的」だった。新しく生まれつつあった都市には、波止場や工場とともに、その背景として果樹園と水田があったのだ。

大掛かりな工業化と近代化のなかで、ムンバイは、当時の他の多くの都市と同じように、急激に変化した。そして独立後には、近代化の重荷はさらに都市をねじまげた。建築物として唯一受け入れられる変容としては垂直性があり、都市主義のイデオロギーによって、既存の住居は余剰のものとされた。

興味深いことに、ムンバイの貧民は、現在でも同様の住居建築のパターンを踏襲している。彼らは、住居を建築するためにコスト・パフォーマンスのよい方法を探し、建築行為にさまざまな技術を結集させている。それらをスラムにしているのは、彼らが住んでいる土地が競争的な市場に入っているからだ。それによって、彼らの建築物は不法なものとなり、そして彼らは、非市民のゾーンへと追いやられ、抑圧の悪循環のなかに閉じ込められるのだ。貧民たちは、地位を悪用して多額の不法な取り立てをおこなう、国家のインフォ

一マルな装置の犠牲となり、非市民という立場においてほとんどすべての収入をむしりとられる。こうした状況が悪化し、貧民たちが抹消されるという恐れは常にあるのだ。

こうした話はムンバイではよく知られている。しかし、こうした知識は、腐敗していない国家の一部、社会奉仕グループ、メディアなどほとんどすべての人を活動に駆り立てるのではあるが、しばしば建設業界の鏡像において貧民のための住居をつくろうとする欲望へと翻訳されてしまう。設計者、建築業者、技術者、建築家などを通じて、都市の風景を特定の建築物、すなわち必ず高層で貧民の手ではコントロールできない建物が支配するように、計算がなされてしまうのである。ほとんどすぐにコストの問題が提出され、建築業者がはいってこられるように妥協がなされる。建築業者は、利益のために建築をするが、貧民の住居のためには補助金を出すという手筈である。貧民の住居は、近代都市のイメージに沿って建てられる現実の建物の、ほんやりして当てにならない影のようなものになってしまう。何百万人もの貧民を吸収するのに住居が数的に十分であるはずがなく、しかも、そこに住もうとする人々が一世代過ぐすあいだでさえ、建物がもつかどうかもわからないのである。¹⁷⁾

こうした方法が非効率的であることは、ますます明らかになってきている。風景のなかでスラムが支配的なままであり、貴重な（以前は入手可能でさえなかった）土地の広大な区域が富裕層用の巨大なマンションを建てるのに使われているのであるから。空間使用に関するすべての論理を無視して、ムンバイでは、単位床面積あたりの使用人口がより小さい高層ビルディングが増えている。高層であるので、より多くの人口を吸収できそうなはずだが、その空間は富裕層用の住居に用いられるように操作され、結局、プール付きで、広い個室があり、多層の駐車場があつて、緑が茂るような、世界中のどこにでもある、理想的な富裕層向け住居に近くなるように仕向けられるのである。しかし、インドのような貧困国において、その地平線には、貧民と彼らの貧しい住居の存在によって、常に暗闇が覆っている。

6 リーズを思い出しながら

結論として、人類学者であるアンソニー・リーズの仕事を引きことにしよう。¹⁸⁾ リーズの視角は、力強い住居の人類学にわたしたちを導いてくれ、本論で論じてきたいいくつかの問題について一層の光をあててくれるだろう。

リーズによると、都市と農村の空間は、地理的および職業的な差異だけでは理解できない。彼が指摘するところでは、人類史を通じて、多数の人々が農村の住居に暮らしてきたのであるが、これらは、人口のより少ない中心的な都市によって直接的、間接的に形作られ支配されてきたのである。農業実践は、しばしば税の取立てに合わせて特定の種類の穀物を生産するように発達してきたし、農業体系は、封建的な構造を通じて、重要な中心的都市と結び付けられてきた。こうして、たしかに多くの人々は物理的には都市に住んでいなかったものの、世界は非常に長いあいだにわたって都市化されてきたのである。産業革命は、都市空間により多くの人々を移住させたひとつの契機にしか過ぎなかった。もっと

も重要なことに、近代、進歩、都市化という語りは、さまざまな形で何度も使われてきた。これまで論じてきた都市主義というイデオロギーは、こうした語りの一部をなすものであり、個別に分析される必要がある。

特に、(都市化された)農村の居住地の歴史が長い、インドというような文脈においては、ムンバイのような都市スラムとその居住者が捨ててきた農村の居住地とのあいだの驚くべき類似性について考察する必要がある。世界において、諸都市がますます異なる姿をとるようになっていくなか、それらがどのような形態をとるべきかについて再考しなければならないだろう。というのは、それらは同じ形態をとるのを拒否しているようにみえるからだ。アナクロ的な都市村落のコタチワディについてよく考え、都市が固定的な願望をつくり出し、不適切な住居を、私たちがスラムと呼ぶイデオロギー的な荒地へと分類してしまうさまについて、再考する必要がある。

追記

筆者は、本論を執筆するにあたって、マティアス・エチャノヴェ氏(都市計画家、現在、東京大学大学院博士課程に在籍)との対話から多くの着想を得た。また、本論を日本で執筆する際に平和中島財団2006(平成18)年度外国人研究者等招致助成を受けることができた。記して感謝したい。

注

- 1) 本論は、私が直接的に参加した2000年から2005年のあいだのプロジェクト活動に基づいている。今日では、このプロジェクトは、「都市における知識、行動と研究のパートナー Partners for Urban Knowledge Action and Research (PUKAR)」において研究をなす際の、多数の方法論のうちのひとつとなっている。PUKARは、2001年に、アルジュン・アパデュライによって設立された。
- 2) [Appadurai 1996]を参照。
- 3) ウィルソン近隣社会プロジェクトをおこなった1999年から2002年までの、私の学生たちの社会的・経済的なプロフィールの詳細は以下のとおりである。約30%の学生は、ボンベイに織物工場が最初に建設された20世紀初頭に、この都市に移住してきた波止場労働者か産業労働者の子孫であった。別の30%は、高カーストで教育程度の高いいくつかのコミュニティの出身であった。それらは、役人として勤めていたマラーティー語話者の家族や、ビジネスをするか役人をしていた英国化されたパルシー系の家族、小さな商売をしていたグジャラーティーの家族であった。残りの40%は、都市の外からやってきた学生や、都市の他の地域からやってきた学生であった。学生の60%以上は、大学教育を受ける第一世代であった。ほとんどの学生は英語がうまくなかったが、より多くの機会を獲得するために、英語での教育を望んだのであった。
- 4) これらの点については、別の論考で論じている。[Srivastava 2002: Forthcoming]を参照。
- 5) これは、住民とのパーソナルコミュニケーションに基づくほか、[Dwivedi and Mehrotra 1995]によっても裏付けられた。
- 6) この過程から、近隣社会において、カーストと宗教の違いに基づくたくさんの分断——一番大きなものはカトリックとヒンドゥーのあいだにあるそれ——が存在することが明らかになった。しかし、協会には、さまざまなコミュニティが平等に参加しており、こうした違いや緊張に対して創造的な形で対処している。祭典の運営においては、緊張や対立があったのは宗教コミュニティのあいだにではなく、祭典委員会の内部においてであり、それは民族対立からもまったく離れていた。
- 7) [Correa 1989]を参照のこと。
- 8) [Tindall 1992]を参照のこと。

- 9) [Sharma 2000] を参照のこと。
- 10) 近隣社会プロジェクトがジュフウとウォルリの地域でおこなった研究に基づく。この研究は、2003年と2004年に、'Juhu Together' (ジュフウとともに) という市民団体およびディルバイ・アンバニ国際学校の CAS プログラムの学生とともにおこなわれた。
- 11) 拙稿 [Srivastava 2006] を参照のこと。
- 12) もちろんのこと、旧賃貸法においても、これらの残された建築物は修理されないままに、みすぼらしい姿でありつづけるように仕向けられた。それに、都市全体においても、借家を発展させることはなく、このことはスラムの増大に拍車をかけた。これに関連しては、[Patel 2005] を参照のこと。
- 13) [Davis 2004] を参照のこと。
- 14) [Breman 2006] を参照のこと。
- 15) [Breman 2006] を参照のこと。
- 16) [Davis 1999] を参照のこと。
- 17) ヨーロッパとアメリカにおいては、都市空間や貧民に関する検査を慎重におこなって建設されながら、そのあとすぐに壊されてしまった近隣社会の例が多数存在する。いくつかの場合は、それらは美的な面でひどいものであったし、他の場合においては、犯罪と暴力という、古いスラムが体现していると考えられた否定的な伝統エネルギーを、近代的で垂直的なビルへと吸収したのであった。
- 18) [Leeds and Sanjek 1994] を参照のこと。

参考文献

- Appadurai, Arjun 1996 *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis: University of Minnesota Press (アルジュン・アパデュライ 2004『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』門田健一訳, 平凡社)。
- 2000 Spectral Housing and Urban Cleansing: Notes on Millennial Mumbai, *Public Culture* 12(3): 627-651.
- 2001 Deep Democracy: Urban Governmentality and the Horizon of Politics, *Environment and Urbanization* 13(2): 23-43.
- Bhatt, Vikram and W. Rybonzynski 1984 *How the Other Half Builds*. Montreal: Center for Minimum Cost Housing, McGill University.
- Breman, Jan 2006 Slumlands, *New Left Review* 40: 141-148.
- Clarke, Linda 1992 *Building Capitalism: Historical Change and the Labour Process in the Production of the Built Environment*. London: Routledge.
- Correa, Charles 1989 *The New Landscape: Urbanization in the Third World*. London: Butterworth Architecture.
- Davis, Mike 1999 *Ecology of Fear, Los Angeles and the Imagination of Disaster*. New York: Vintage.
- 2004 Planet of Slums, *New Left Review* 26: 5-34.
- Dwivedi, Sharada and Rahul Mehrotra 1995 *Bombay: The Cities Within*. Bombay: India Book House.
- Government of India (GOI) 1998 *National Housing Policy*. New Delhi: Ministry of Urban Development.
- Government of Maharashtra (GOM) 1997 *Guidelines for Implementation of Slum Rehabilitation Schemes in Greater Mumbai*. Mumbai: Slum Rehabilitation Authority, Housing and Special Assistance Department.
- Hart, Keith 2003 *Studying World Society as a Vocation*. Goldsmiths Anthropology Research Papers No. 9. London: Goldsmiths College.

- Harvey, David 2001 *Spaces of Capital: Towards a Critical Geography*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Leeds, Anthony and Roger Sanjek (eds.) 1994 *Cities, Classes and the Social Order*. Ithaca: London: Cornell University Press.
- Mumbai Metropolitan Region Development Authority (MMRDA) 1995 *Draft Regional Plan for Bombay Metropolitan Region 1991-2011*. Mumbai: MMRDA.
- Patel, Shirish 2005 Slums mean failed Housing, *Indian Express*, Thursday, 6, January.
- Rao, Vyjayanthi, Pankaj Joshi and Rahul Srivastava 2004 Heritage, Habitats and Diversity, *A Report for UNESCO*.
- Sharma, Kalpana 2000 *Rediscovering Dharavi, Stories from India's Largest Slum*. Penguin.
- Srivastava, Rahul 2002 The World Next Door, *Journal Humanscape*, August.
- 2006 Heritage Angst, *PARMAL: The Annual Journal of the Goa Heritage Action Group*.
- (Forthcoming) Digitizing the Sociological Imagination, In Rajan Nalini (ed.), *Culture and the New Digital Technologies*. New York & London: Routledge.
- Tindall, Gillian 1992 *City of Gold: The Biography of Bombay*. Delhi: Penguin.
- United Nation Centre for Human Settlements (UNCHS) 1996 *The Istanbul Declaration and Habitat II Agenda*. Istanbul: Habitat.
- 2001 *Cities in the Globalizing World*. Nairobi: Habitat.